



年間第3主日(神のことばの主日)(マタイ 4:12-23)

神のことばは闇を照らす光

教皇フランシスコは、自発教令の形式による使徒的書簡『Aperuit illis』を、2019年9月30日(聖ヒエロニモ司祭の記念日)に公布して、年間第三主日を「神のことばの主日」と名付け、「神のことばを祝い、学び、広めることにささげる」ことを宣言されました。自発教令の一部を引用します。

「それぞれの共同体は、ある程度の荘厳さをもってこの主日を特徴づけるための、自分たちにふさわしい方法を見つけていくことでしょう。しかし大切なことは、神のことばの規範としての価値に会衆の注意を向けさせるために、聖書のことばがミサにおいて賛美されることです。

この日曜日には、主のことばを告げ知らせることを際立たせ、説教においてそのことばをふさわしくたたえることを強調するのが、とくにふさわしいといえるでしょう。

司教たちは、典礼における神のことばの告知の重要性を明らかにするために、朗読奉仕者の選任式、あるいは朗読者を任命するための類似した式を執り行うことができるでしょう。

この点について、みことばの真正な朗読者となるために必要な養成を信者に提供するために、新たな試みがなされるべきです。このことは、すでに祭壇奉仕者あるいは聖体拝領のための臨時の奉仕者の場合には行われています。

司牧者たちは、聖書をどのように読み、味わい、そして日常的にどのように聖書とともに祈るかを学ぶ重要性を示す手段として、聖書あるいは聖書の中の一つの書物を全会衆に与える方法を見つけることもできます。とくに、『霊的読書(レクツィオ・ディヴィナ)』の実践を通して、そうすることができます。」

いくつか、大事だと思われる点を抜き出しますと、「聖書のことばがミサにおいて賛美される」そのような工夫をすること、「主のことばを告げ知らせることを際立たせ」「説教においてそのことばをふさわしくたたえることを強調する」具体的な取り組み、そして「霊的読書(レクツィオ・ディヴィナ)』の実践」この四点がさしあたり必要です。

一つ目、「聖書のことばがミサにおいて賛美される」これについては、「朗読用聖書」を祭壇に立てかけて、そこから聖書を説教台に運び、可能な限り恭しく朗読することを心がけました。年間第三主日に、忘れていなければ続けてみたいと思います。

二つ目、「主のことばを告げ知らせることを際立たせる」この点については、いつもは毎週用意されている「聖書と典礼」を使用している信徒の朗読者も「朗読用聖書」をできるだけ使用し、信徒席から運んでいくようにすると良いと思います。

三つ目、「説教においてそのことばをふさわしくたたえることを強調する」たった今、ふさわしくたたえるための具体的な取り組みを説明

しています。神のことばに対する最大の敬意を表すために、繰り上げのミサと9時のミサでは朗読聖書に献香をしてみました。

そして最後、四つ目として「『靈的読書（レクツィオ・ディヴィナ）』の実践」です。私たち長崎教区の教会は、「聖書愛読」という取り組みを続けています。この取り組みをさらに磨いていくことが、「靈的読書（レクツィオ・ディヴィナ）」につながっていくと思います。

最後の靈的読書について、もう少し話しておきます。聖書を読むことで、私たちが導きを得ていると感じる。靈的読書はここまで私たちを運んでいきます。

例えば今週の福音朗読、「四人の漁師を弟子にする」という場面が選ばれていますが、朗読が、私たちをその場に立ち会っている登場人物の一人と感じさせるほど、気持ちを込めて読み返してみましょ。ここから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。」（4・21-22）

ヤコブとヨハネの立場に立って、もう一度読み返してみます。なぜ二人は、すぐに、舟と父親とを残してイエスに従ったのでしょうか。自分なりの答えにたどり着くまで、ゆっくり読んでみたり、二度三度読んでみたりしてください。

また、舟の乗組員と父親の立場に立ってみましょ。なぜ父親は、息子二人を止めなかったのでしょうか。反対もせずを送り出したのでしょうか。皆さんなりの答えが見つかるまで、繰り返し読み返す。すると、「聖書を読むことで、私たちが導きを得ていると感じる」この意味が分かってくると思うのです。

私たちはだれもが父親であったり母親であったり、息子や娘であったりするわけです。息子が舟と父を残して出て行く。なぜ止めないのかなぜ反対しないのか。その答えが父親にも息子にも見えた時、私たちは今週の朗読から導きを得ているのであり、その時こそ「靈的読書（レクツィオ・ディヴィナ）」を体験しているのです。

これから私たちは年間第三主日を「神のことばの主日」として繰り返し迎えます。この主日が、日々の生活に神のことばを取り入れるきっかけとなりますように。日々、神のことばに導かれている実感を得られるきっかけとなりますように。「暗闇に住む民の大きな光、死の陰の地に住む者の光」であるイエスに、続けて照らしと恵みを願いましょ。